

## 日本造形の連続性について No. 3

デザイン学科・工業デザイン研究室

飯 岡 正 麻

### A Study on Interfusion of Japanese Culuture by Masao IIOKA

#### 1. はじめに

日本造形の連続性についての考察と題する一連の研究の最終目的は、単に造形物としての物質の世界に限らず、伝統的な日本文化の根底に存在する特質を抽出し、それが現代の物の世界、工業製品などの中に、どの様な形で現われているかを考察することにある。もちろん、ものの形としてのみでなく、結果としてそのものを通して、我々の生活様式がどの様な変化をしたかを考察することでもある。

第一報では、日本的な人と人のつながり方、人と自然のつながり方を考察した。そこでは、人にしろ物にしろ、個が絶対的存在として、人やもの、環境と対じるのではなく、緩やかにまわりの物と連続しながら、まとまりを見せると言う特質があった。人間はまず個が存在するのではなく、家の一員である。会社員は対社会的に、あくまでも会社を代表するのであって、個人性は抑えられねばならない。自然に対しては、人間も自然の一部と考え、人間と自然を対決させて、此を征服すべき対象と言うようには考えなかった。

第二報では、日本の伝統的造形空間における連続性についてまとめてみた。それは、人と人、人と自然のみならず、伝統としての日本文化全般の根底に、その特性の1つとして連続性と言えるものが存在していて、それが日本の空間に大きな影響を与えていることを証明しようとするものであった。

伝統的な日本の建築においては、質を同じくする空間ばかりでなく、質、機能を異にする空間に

おいても、その相互関係のあり方は、明確に裁然と区切られ分離、分割されるのではなく、その両者の間に何等かの仕掛を構え、あるいはそのどちらでも無い媒介物を介在させて、緩やかにつながうとするものであることを、具体的な例を挙げて検証することが出来た。ただそこで連続性を証明した空間は、同一時に並列におかれた、いわば物理的水平的空間であった。しかし、一方で日本の空間の使用の仕方には、同一空間において、異なる機能を時間差で連続させてゆくと言う連続のさせ方がある。時間的、垂直的連続性である。例として、日本の住宅における座敷と呼ばれる空間の使用の仕方を考えてみると、そこに応接台、座布団を配して人に接すれば、応接間であり、その応接台の上に食器を並べて食事をすれば、そこは食堂となる。全ての道具を取り払って夜具を延べれば、寝室となる。空間そのものが、道具の配置によって、その性格、機能を変えてしまうと言うことは、その空間自体は特定された機能を有せず、非常に無性格な空間でなければならない、ということが重要な点である。日本の空間は、この様に非常に無性格な灰色の空間として提示される。この平常においては道具が何も無く、その結果機能を持たない無性格な灰色の空間であるということは、室内と室外をつなぐ軒下が、内部空間か外部空間が分からない無性格な灰色空間であったことと、その性格を明確にしないという意味において一致する。この機能を明示、或は暗示さえしない空間の無性格さが、時系列の中で機能を連続させるために構えられた仕掛という事ができる。

この様に考えると、日本文化の根底に潜む連続

性とは、物事を分析して、それぞれに対応し、これを足し算的につないで行くのではなく、物事を無性格にしておくことによって、全てに対応しようとする事と言えよう。しかもその無性格さは、混沌ゆえではなく、一対一応する機能性を乗り越えた、凝縮された単純化、標準化の中にある様に思える。この標準化し、単純化する日本文化の特質は、本質を異にすると考えられる西欧的分析的手法の延長線上にある工業化、大量生産のシステムを採り入れる時に、それを受け入れ易い土壌を用意したのではないだろうか。このことについては別の機会に考察してみたい。

ここでは、これまで概略して来た、空間の連続性にみられる、無性格さ、灰色による連続性が、道具の世界にはどの様に表れるか、まず本研究の本題に入ることにする。

## 2. 伝統的な道具における連続性について

時系列において、同一空間の機能を連続させるということは、無性格で単純な空間を提示して、これを万能化するということであった。この単純化による機能の万能化、連続化は、日本の伝統的道具にも見られるものである。ここですぐに現代の工業製品を考察する前に、伝統的な道具に見られる連続性について、いくつかの実例をあげておきたい。

**例1 箸** 西欧の食事の際に、日本の箸と同じ役目を果たす道具は、一対一応の形で専門化され多様化される。肉、魚、果物のためのナイフとフォーク、スープ、コーヒー、アイスクリームのためのスプーン、バターのためのナイフ等である。食卓で使われるそのほかのナイフを挙げてみてもグレープフルーツナイフ、トマトナイフ、チーズナイフ、デザートナイフ、フィッシュカービングナイフ、などがある。切る相手や大きさによってそれぞれに専用のナイフが用意されている。日本人の食事において、これに対応するのは箸という2本の棒のみである。中国、韓国にある匙さえも日本の食卓からは姿を消している。正倉院の御物の中

に金属性の匙があるから、大陸の文化として一度は日本にもたらされたのは確実であるが、その後の日本人の生活の中に根付かなかった。料理の仕方、器の形状との相関は当然あるし、道具を使わないで食事をする人達もいる。しかし、2本の棒だけで食事をすると言うことは、道具としては、単純化による万能化の極地と言えよう。この2本の棒は、あらゆる食べ物の種類、質、形状に対応し、挟む、混ぜる、切る、動かす、集める、運ぶといった全ての食事に必要な動作に対応する。このような機能的な連続性ばかりではない。ロラン・バルトは、箸と題するエッセイで、次のように書いている。

「箸は、食べ物を皿から口へ運ぶ以外に、おびただしい機能を持っていて、(単に口へ運ぶだけなら、箸は一番不適合である。)そのおびただしさこそが箸本来の機能なのである。…同じ1つの皿の中の食べ物だけを、機械的に何度も反復して喉を通すことを避けて、箸は己の選択したものを示しながら、食事という日常性の中に、秩序ではなく、いわば気まぐれと怠惰を持ち込むのである。」

彼の言う、おびただしい機能を果たすと言うことが、あらゆる機能を連続させている事を示しているし、そのためには箸は、単純化されて、単なる2本の棒になってしまわねばならなかった。

**例2 風呂敷と手拭** 人間が物を持って移動しようとする時、物を保護し、運びやすいようにするための運搬具として、日本には風呂敷がある。これで水瓜の様な丸いものも、一升瓶の様な筒状の物、菓子箱の様な箱状の物もどんな形状の物も包んでしまう。大きさも問わない。スーツケース、アタッシュケースと言うように一対一応する必要はない。物としては正方形の1枚の布である。使用しないときは畳んでしまえばよい。

手拭もまた一枚の布きれである。その名の通り、本来は手を拭くものであろうが、そのほかにいろんな役目を果たす。風呂には入る時にはタオルの役目を果たすのはもちろんの事、大工や寿司屋では、いなせな向こう鉢巻となり、家の中で女性が姐さん被りをして掃除をする。顔を隠すためのほ

う被りもある。落語家の手拭はもっといろいろな物に変化する。手拭は使われる型によって職業を示し、今している仕事を表す。実用的でありながらシンボルでもある。すべて3尺×1尺位の長方形の布である。この単純な形であるからこそ、いろいろな機能を果たす事ができ、多様な状況に対応できるのである。

ホテルでは洗顔、入浴のためだけに、いろんな大きさに使用目的の異なる多ければ四枚のタオル、マットが用意されている。



写真1

**例3 和服** 和服を仕立てる場合、採寸をする必要がない。身丈と衿と身幅を聞けば十分である。後は総て標準化されているのである。女物の場合、着るときのはしりが有るから、身丈も必ずしも厳密である必要がない。服そのものが1対1応として、個人に合わせて作らないから、それを誰でも着ることが出来る。そのために服そのものは直線だけで構成される。衿を調整するのにも、布を切り取ることをせずに、縫い込んでおく。縫い直すときには、元に戻すことが出来、成長に合わせることも出来るのである。ここにもまた単純化によって、多様な状況に対応する姿勢がみられる。

以上の様に、伝統的な道具の考察においても、空間においてそうであった様に、やはりそれ自身無性格で、対象となるものを特定せず、灰色の状態であること、そうあるためにそれ自身は単純化し、標準化され、その事によって異なる機能を連続させていることが、共通している点である。

しかし、ここで例として観察したものが特別な例であり日本における道具にも、特殊化した多様

な道具があることが指摘されるであろう。例えば日本の伝統的職人の中で、最も数多くの道具を使うものの1つに大工がある。本来職人の道具は自分のものは自分で作る、あるいは自分用に作らせるのであるから、どの様な材料に対してどの様な加工をするかで、多様な機能を持つ道具が数多く出来てくることになる。昭和24年の統計では、当時の大工が所有する平均的道具の数は、必要にして十分な整備形式なら179である。(労働科学研究所編「わが国大工の工作技術に関する研究」)確かにこれを見る限り日本の道具も多様な機能に対応して多様な形をとっていると言えるかも知れない。しかし飛鳥時代の大工の技術を語るなかで「飛鳥型ののみに、曲がった柄をつけましたら手斧の代わりに使えますのや。のみを斧の代わりに使った。これひとつみても、今の大工のように下手じゃない。1つの道具をいろいろ使いよる。今の大工は下手やからいろんな道具がないと仕事できへん。道具多く持つてるやつほど下手や」と法隆寺の宮大工西岡常一は話している。天平時代の建築の味を出すためには、苦心惨胆して檜がんなを復元したこの人にしてである。この言葉を聞くと、彼らの考え方の根底には、やはりその様な道具観が存在していることが分かるのである。

### 3. 現代の道具における連続性について

現代の工業製品に、前述したようなことがどの様に現れ、表されているか。その例として、製品化はされていないが、上田篤氏が「車は弱者のもの」で発表されたツボ車を取り上げて、日本的空間処理の仕方、機能の連続性が現代の工業製品とどの様に結びつくのか検証してみたい。

上田篤氏が提案したツボ車とは、一坪の広さを持った車である。その内部空間は、座席も何もなく文字通り一坪のフラットフロアとして提示され、車高も1.85メートルあり天井も高い。何もない一坪の空間は二畳敷の日本間を思い起こさせる。それは使用機能を規制しない。どの様にも使うことが出来る。従来車の様に移動するために座

席に座るだけの空間ではない。平座もできれば寝ころぶ事もできる。姿勢の多様化は、そこで出来る行為の多様化でもある。椅子は壁に畳み込まれていて、必要があれば引き出して使えばよい様になっている。

フロントウインドの上には小さな庇がある。これは、運転者への日差しを和らげ、乗降の際に雨が掛かることを防ぐ。内でもなければ外でもない軒下と同じ灰色の空間である。底下と運転席は土足であるが、この車のフロアーは住居としての建築の室内とつながれるから、当然下足を脱いで上がることになる。前から下足のまま入る運転席は、土間か玄関の役目をする。この車は、バックして物理的に建築物とドッキングすることによって、住居の一部となる。そのため後部の扉は引戸である。この空間の処理の仕方は、「日本造形の連続性について-2」で述べておいた日本の空間処理の特質そのものである。

この車は狭い日本の住居空間を少しでも拡大すると共に、都市部の住宅で特に問題になる駐車空間を有効利用しようとしている。その様なことも含めて「家と都市を結ぶ生活空間の連結機」であり「住まいの触手、或は、住まいと都市を結ぶ架け橋」である、と上田氏は述べている。これは日

本的空間処理の様式、特にその最も大きな特質である連続性が、車という工業製品に持ち込まれたよい例である。まさに日本的に発想された車であると考える由縁である。

#### 4. 現代の工業製品にみられる連続性

次にこの様なことが、実際に生産された現代の工業製品としての道具の中にもどの様に表れているかを考察して見ることにする。現代の道具における連続性を考察する時、その根底に異なる文化との連続性など非常に大きな問題を含んでいて、それを避けて通れない事があるが、そのことは亦の機会に譲るとして今回は単純に物理的なものとの連続性を考察することにする。

ここで連続性を考察するに当たって、大きく二つに分けて考えることにする。各々の機能は異なるものが、生態学的な関係があって一つのまとまりを見せる場合、別の言い方をすれば共存している場合と、それが物理的にもつながってしまっ一つのものとして一体化したものに分けて考えてみよう。

例としてここでは最近商品の多様化が著しい文房具を取り上げてみることにする。

**写真2** この商品は鉛筆、鉛筆削り、消しゴム、

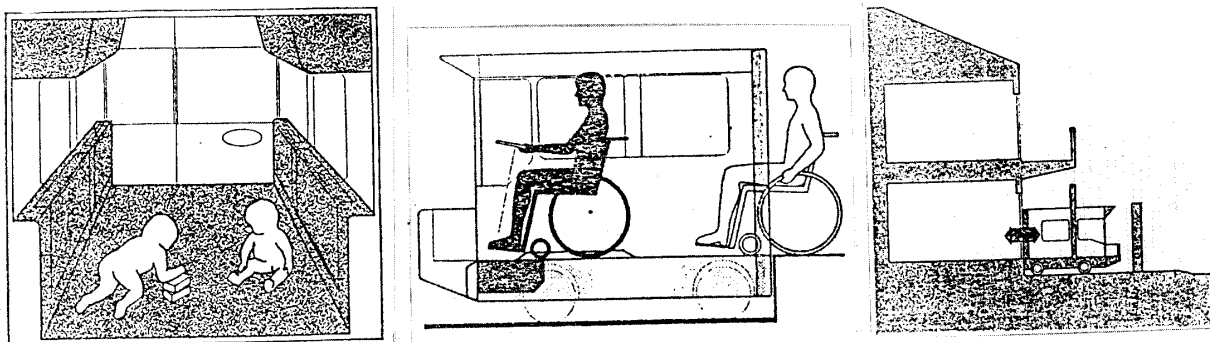


図 1

左より、車内は一坪の広さで、椅子は両サイドにたたみ込まれている。中は側面で、車のフロアーと住宅の床の高さが同じであるので車椅子も直接乗り入れることも出来る。左のように住宅と連続して駐車スペースを有効利用し、狭い室内を広く使うことが出来る。(図は上田篤著、「くるまは弱者のもの」より転載)

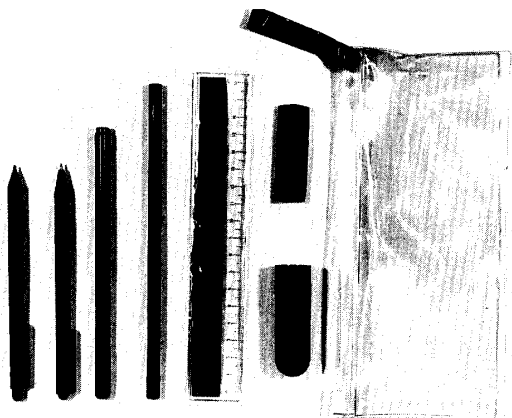


写真 2

シャープペンシル、ボールペン、ソフトペン、定規のセットであって、これらの物が透明のケースの中に入っている。それぞれは完全に同じ形態を強制されてはいないが、外観はある程度規格化されていて、色は黒一色である。

本来、生態学的に集まりやすいこれらの物が透明なケースに納められているが、このケースは日本的相互の関係のあり方から言えば、同じ屋根の下、同じ釜の飯に当たるものである。日本建築の屋根は、その下にある空間を1つに纏めると同じように、その下の人間も1つに纏める。家とは物理的のものであると同時にそこに住む家族や集団を指す。家（うち）の者とは血のつながりを指し、うちの会社と言う場合心のつながりを指す。その中に入ってしまうえば、それぞれの個が持つ個性よりも、外に対しては、個体よりも集まり、集団の方が優先する。社会において、個人より家が、社員の個性より会社が対外的に優先するのと同じである。黒一色に統一された色は、集団社会の制服に当たる。制服は個性を抑えて全体的統率のもとに置くためにはよい方法である。しかし、この例の場合、個々の機能は、外観をもって識別できる。それだけの個性は残されている。

**写真 3** この商品はシャープペンシル、ボールペン、クリップ入れと消しゴム、カッターナイフ、色と幅の異なる2種のソフトペンのセットであってケースの中に収まっている。これらの物は、異

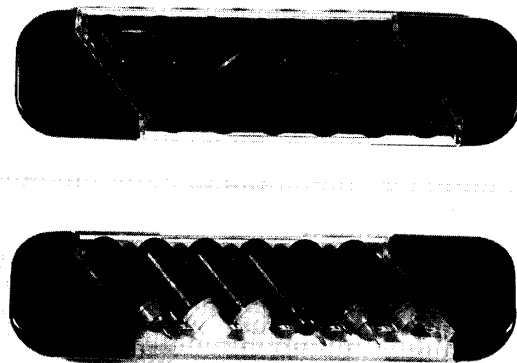


写真 3

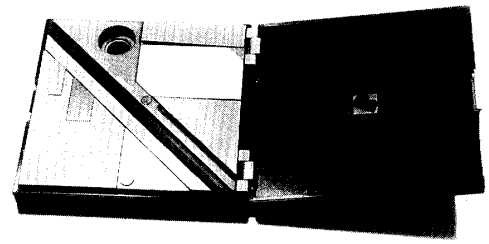
なった機能を持っているにもかかわらず、完全に同じ形をしていて、外観を見てもその機能、使い方を知ることは出来ない。各々の個性は完全に抑えられ、全体としてのまとまりが優先している。本来持つべき機能でさえ、全体的まとまりのためには犠牲にされてしまっている。個より全体が優先する。

**写真 4** 比較という意味でここに挙げたのはスイスアーミーナイフと呼ばれているものである。ここでは、それぞれの機能を持つものが、必要性から集合している。前の例と異なる点は、一応個別でありながら、同じ屋根の下に集まると言うのではなく、物理的に一体化してしまっている点である。一体化しているにもかかわらず、個々の機能は出来る限り残しており、それぞれの個性は規制されていない。個々が独立性を保ちながら、物理的につながっている。それは集まっていることが優先であって、まとまることが目的ではないのである。その結果として、形態的スマートさに欠ける所があるように見える。しかし、形態においては全体的なまとまりは欠けても、それぞれが持つ機能、形態上の個性が失われていないのは、集まると言うこと自体が、機能的必要性からきているからである。

**写真 5** これは9つの機能が一体化した日本の製



写真 4



A

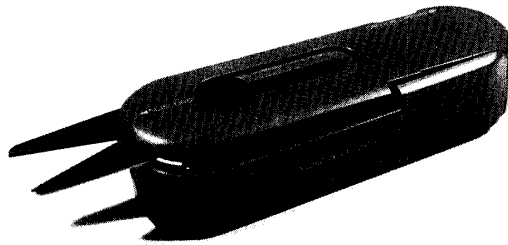
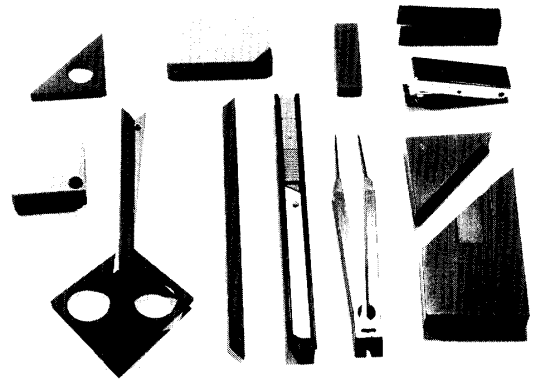


写真 5



B

写真 6

品である。スイスアーミーナイフに比べると、全体のまとまりが優先し、集められた各々の機能が持つ本来の形態は、まとまりのために抑えられている。その結果、本来その物が持つべき機能そのものも、全体的まとまりの為に制限を受ける。ここでも、個を失ってもなお全体のまとまりを優先させようとする態度がある。もともとこの発想の原点において、まとめると言う面白さが優先していて、まとめねばならないと言う機能的必然性は希薄である。集めることに必然性があるのではなく、どちらかといえば、纏める、繋ぎ合わせることに設計する者の興味の中心がある。

**写真 6** B collection PALETTACOM の場合もやはりまず全体がある。この製品自体遊びの概念が強いものではあるが、機能あるものの集まりである事には違いない。機能を有するそれぞれの個は全体を構成する要素であるから、それに奉仕するものとして存在する。個々に機能を持つもので

あっても、全体を生かすためには個が強い制限を受ける。全体がまとまるということが先にあり、そのために個は従属させられる。その個は抽象化され、外形的には幾何形態化され、本来の機能からは、かけ離れた形態をしていて、全体という目的にたいする部品にさせられてしまっている。

日本的連続性は、物の世界においても、人の世界と同じように、個性を抑えることによって、個を強く主張しない事によって、或は、無性格にすることによって、他との関係を調整し全体のまとまりを維持しようとする事が観察できた。それ故に標準化され、単純化するという法則性はここにも見られるように思える。それが、人間においてそうであったように、物においても個性の主張が弱くなる原因にもなっているのではないだろうか。

この事が、デザインをする時点では、そのものの独自性、アイデンティティーを追求していながら、ここで例として取り上げた最近の文房具の売

り場のように、或は工業製品がそうであるように、住宅建築や団地がそうであるように、大きく言えば現代における日本の視覚的環境全体が、全て同じ様に見えてくる原因でもあるのではないだろうか。

しかし、ここに挙げたいいくつかの例をして、全体を証明するには無理がある。特殊な例をいくつか挙げて全体とするのは感は免れ得ていないようである。次回以後、現代の道具における連続性、それが依ってくる日本的造形の特質について、そ

の普遍性を証明するために、もう少し詳しく考察することにする。

#### 参考文献

- ロラン・バルト 宗 左近訳「箸」(表徴の帝国より) 新潮社  
西岡常一「木に学べ」小学館  
上田 篤「車は弱者のもの」中公新書  
村松貞次郎「大工道具の歴史」岩波新書  
中埜肇「空間と人間」中公新書…